

葉限

段成式

南人相伝。秦・漢前有洞主吳氏。土人呼為吳洞。娶兩妻。一妻卒。有女名葉限。少惠善淘金。父愛之。末歲父卒。為後母所苦。常令樵險汲深。時嘗得一鱗。二寸余。頰髻金目。遂潛養於盆水。日日長。易數器。大不能受。乃投於後池中。女所得。余食輒沈以食之。女至池。魚必露首枕岸。他人至。不復出。其母知之。每伺之。魚未嘗見也。因詐女曰。爾無勞乎。吾為爾新其襦。乃易其弊衣。後令汲於他泉。計里數百也。母徐衣其女衣。袖利刃。行向池。呼魚。魚即出。首因斫殺之。魚已長丈余。膳其肉。味倍常。魚藏其骨。鬱棲之下。

逾日。女至向池。不復見魚矣。乃哭於野。忽有人被髮粗衣。自天而降。慰女曰。爾無哭。爾母殺爾魚矣。骨在糞下。爾婦可取魚骨藏於室。所須第祈之。當隨爾也。女用其言。金璣衣食隨欲。而具及洞。節母往。令女守庭果。女伺母行遠。亦往。衣翠紡上衣。躡金履。母所生女認之。謂洞人所得。母婦但見女抱庭樹。眠亦不之慮。

其洞隣海島。島中有國名陀汗。兵強王數十。島水界數千里。洞人遂貨其履於陀汗國。國主得之。命其左右

履^{カシム}之^ヲ。足^ノ小^{サキ}者^ノ履^{カント}減^{スルニ}一^ズ寸^ヲ。乃^チ令^{ムルモ}一^ニ国^ノ婦^人履^カ之^ヲ。竟^{ツヒニ}無^シ一^モ称^{カナフ}者^ノ。其^ノ輕^{キコトク}如^レ毛^ノ。履^{フムモ}石^ヲ無^シ声[。]乃^チ以^テ是^コ履^ヲ棄^テ之^ヲ於^{ダウ}道^ノ旁^ニ。即^チ遍^ニ歷^{シテ}人家^ヲ捕^{ラフ}之^ヲ。若^{モシ}有^{レバ}女^ノ履^ク者[、]捕^{ラヘテ}之^ヲ以^テ告^グ得^テ葉^限。令^{ムルニ}履^カ之^ヲ而^{シテ}信^{マコトナリ}。葉^限因^{リテ}衣^ニ翠^ノ紡^ノ衣^ヲ躡^{キテ}履^ヲ而^{シテ}進^ム。色^若天^人也。始^{メテ}具^{ツギキ}事^ヲ於^ニ王^ノ。載^{セテ}魚^ノ骨^ト与^{トヲ}葉^限俱^{トモニ}還^{カヘレリニ}国^ニ。陀^汗王^至国^ニ以^テ葉^限為^ス上^ノ婦^ト。成^式旧^ノ家^人李^リ士^シ元^{げん}所^{ナリ}說^ク士^元本^{もと}邕^{よう}州^洞中^ノ人^{ナリ}多^ク記^シ得^{タリ}南^中怪^事。

(酉陽雜俎)

【書き下し文】

南人相伝ふ。秦・漢の前に洞主呉氏有り。土人呼びて呉洞と為す。両妻を娶り、一妻卒す。女有り、葉限と名づく。少くして恵く善く金を淘ぐ。父之を愛す。末歳父卒す。後母の苦しむる所と為る。常に險に樵し深きに汲ましむ。時に嘗て一鱗の二寸余りなるを得たり。積鬢にして金目なり。遂に潜かに盆水に養ふ。日に長じ、数器を易ふ。大にして受くる能はず。乃ち後池の中に投ず。女得る所の余食、輒ち沈めて以て之に食らはしむ。女池に至れば、魚必ず首を露して岸に枕み、他人の至れば復た出でず。其の母之を知り、毎に之を伺ふも、魚未だ嘗て見れざるなり。因りて女を詐りて曰はく、「爾勞るる無きか。吾爾の為に其の襦を新たにせん。」と。乃ち其の弊衣を易ふ。後他泉に汲ましむ。里を計るに数百なり。母徐ろに其の女の衣を衣、利刃を袖にして池に行きて魚を呼ぶ。魚即ち首を出だす。因りて之を斫殺す。魚已に長ずること丈余、其の肉を膳するに、味常魚に倍す。其の骨を鬱棲の下に蔵す。

逾日、女池に至るも、復た魚を見ず。乃ち野に哭す。忽ち人有りて被髪粗衣、天より降り、女を慰めて曰はく、「爾哭する無かれ。爾の母爾の魚を殺せり。骨は糞の下に在り。爾帰らば、魚骨を取りて室に蔵すべし。須むる所は第だ之に祈れ。当に爾に随ふべきなり。」と。女其の言を用ゐて、金璣衣食欲するに随ひて具はる。洞の節に及んで母往き、女をして庭果を守らしむ。女母の行くこと遠きを伺ひて、亦往く。翠紡の上衣を衣、金の履を躡く。母生む所の女之を認め、母に謂ひて曰はく、「此れ甚だ姉に似たるなり。」と。母も亦之を疑ふ。女覺りて遽かに反る。遂に一隻の履を遺ふ。洞人の得る所と為れり。母歸るに、但だ女の庭樹を抱へて眠るを見て、亦之を慮らず。

其の洞の隣りに海島あり。島中に国有りて陀汗と名づく。兵強く数十島に王たりて水界数千里なり。洞人遂に其の履を陀汗国に貨る。国主之を得て、其の左右に命じて之を履かしむ。足の小さき者の履かんとするに、一寸を減ず。乃ち一国の婦人をして之を履かしむるも、竟に一も称ふ者無し。其の軽きこと毛のごとく、石を履むも声無し。乃ち是の履を以て之を道旁に棄て、即ち人家を遍歴して之を捕らふ。若し女の履く者有れば、之を捕らへて以て告ぐ。葉限を得て、之を履かしむるに信なり。葉限因りて翠紡の衣を衣、履を躡きて進むに、色天人のごときなり。始めて事を王に具にし、魚骨と葉限とを載せて俱に国に還れり。

陀汗王国に至りて葉限を以て上婦と為す。

成式の旧家人李士元の説く所なり。士元は本邕州洞中の人なり。多く南中の怪事を記し得たり。

【口語訳】

南方の人々が伝えている。秦・漢の前に部族の長である呉氏がいた。その土地の人々は呉洞と呼んでいた。二人の妻を娶り、そのうちの一人が亡くなった。(亡くなった妻には)娘がいて、葉限と名づけた。若くして聡明でよく砂金を取り出した。父(である呉洞氏)は葉限を愛した。年の暮れに父が亡くなった。(葉限は)義母に苦しめられた。(義母は)いつも(葉限に)険しい山に木を切りに行かせ、深い谷に水を汲みに行かせた。ある時以前に二寸余りの魚を手に入れた。赤いひれで金色の目をしていた。そのまま鉢の水の中で密かに(この魚を)飼うことにした。日に日に大きくなり、いくつか器を換えた。大きくなって(器に)入れることができなくなった。そうして家の裏の池に投げ入れた。娘は食事の残りを、食事のたびごとに(池に)沈めて魚に食べさせた。娘が池にやってくると、魚は必ず顔を出して岸辺にやってくる、他人が来ると決して出てこなかった。義母がこの魚のことを知り、いつも魚の様子をうかがっていたが、魚は今まで一度も現れなかった。そのため娘を騙して言った、「お前は疲れていないか。お前のためにその上着を新調しよう。」と。そうしてそのぼろぼろの着物を取り換えた。そのあと(娘を)いつもとは違う泉に水を汲みに行かせた。その道のりを計ると数百里もあった。義母はゆつくりとその娘の服を着て、鋭い刀を袖に隠して池に行つて魚を呼んだ。魚はすぐさま顔を出した。そこで魚を切り殺した。魚はすでに一丈あまり(約二・二五メートル)にまで成長していて、その魚の肉を食事に出すと、その味は普通の魚よりもはるかにおいしかった。その骨を糞の混じった土の下に隠した。

数日後、娘が池に行つても、二度と魚の姿を見ることはなかった。そのため野原で慟哭した。突然ざんばら髪で粗布の着物を着た人が、天から降りてきて、娘を慰めて言った、「お前は泣くな。お前の母がお前の魚を殺した。骨は糞の混じった土の下にある。お前は帰つて、魚の骨を取り出して部屋に隠しておきなさい。欲しい物があつたらひたすら(この骨に)祈りなさい。きつとお前の願い通りになるだろう。」と。娘がその言葉どおりにすると、黄金や宝石、服や食べ物があるままに手に入った。村の節句の祭りになって母がその祭りに行き、娘に庭の果物を見張らせた。娘は母が遠くに行つたのを見て、(娘も)また祭りに行つた。翡翠の上着を着て、黄金の靴を履いた。(祭りで)母が生んだ娘(葉限の異母妹)が葉限を見つけ、母に言った、「あの人は姉にとっても似ている。」と。母も葉限ではないかと疑った。娘(葉限)は気づいてすぐさま戻つた。その結果靴の片方をなくしてしまった。(それを)村人に拾われた。母が帰ると、娘が庭の木を抱えて眠っているのを目にして、葉限らしき娘が祭りに来ていたかどうかを気にかげなかつた。

その村落の隣に海中にある島があつた。島の中に国があつて陀汗という名前だつた。軍隊は強く数十の島で王者として支配してその水域は数千里にわたつた。村落の人は結局その靴を陀汗国に売つた。国主がこれを手に入れ、家来に命じて履かせた。足の小さい者が履こうとすると、一

寸ばかり小さくなってしまふ。そこで陀汗国中の婦人に履かせたが、結局一人も靴に合う人がいなかった。靴は毛のように軽く、石を踏んでも音がしなかった。そこでこの靴を道端に捨て、家々を巡り歩いて若い女性を捕まえた。もし靴を履く娘がいたら、捕まえて（王に）報告した。葉限を捕まえ、靴を履かせるとぴったり（足に）合った。そこで葉限が翡翠の服を着て、靴を履いて（王の前に）進み出ると、その姿は天女のようなようだった。はじめて王にこれまでのできごとを詳しく話すと、（王は）魚の骨と葉限とを（船に）載せて一緒に陀汗国に帰っていった。

陀汗国王は国に着くと葉限を妻にした。

（この話は）わたくし成式の家によくからいる使用人李士元が話したものである。士元はもともと邕州の村の人である。多く南方の不思議な話を覚えていた。